

哲學研究

第八十七號

第八卷
第六册

「宋子の學」

一

浦川源吾

凡そ或時代に於て廣く其名を知られ、其の懷抱した思想に對して多くの共鳴者乃至は崇拜者を有した思想家であつて、當の思想家自身の手になつた著述が、若しくは其の思想の後繼者達によつて編纂せられた著書の今日迄殘存して、其の思想の體系組織を充分に理解し得るものもあれば、又思想家自身の手になつた著述が亡佚し、其の後繼者によつて記録編纂されず、只他の思想家殊には色彩傾向を異にする思想家の駁撃の的となつて、僅かに其の懷抱して居た思想の斷片のみ留めて居るものがある。前者の場合は、有力なる思想上の後繼者を有するか、さもなければ其の思想が、其の時代の人心、或は其後の時代の人心に適合し、根強く植ゑ付けられたゝめであり、後

の場合、之に反し其の思想が時代の人心を動かした程度が浅く、又後繼者の全く無きか。有るも極めて微力なためによる。今述べんとする宋子の思想學問の如きは、後者の場合に屬するものと思ふ。以下に宋子の學問思想に就いて述べて見やうと思ふ。

—

宋子の名の見えて居るのは莊子の天下篇、荀子の天論篇。正論篇、解蔽篇等と、孟子の告子下章とである。孟子の告子の下章には宋輕とあり。莊子や荀子には宋鉞とある。荀子の非十二子篇の揚偉の註に孟子作宋輕、輕與鉞音口莖反。と言ひ、宋輕と宋鉞とは同人であると主張して居る。孟子の告子の下章の孫奭の疏にも、上述の説を引いて宋輕と宋輕とは同人と思惟して居る。宋輕と宗鉞とが同一人であることは、輕と鉞との同音異字である點から主張されるばかりでなく、孟子、荀子、莊子に引かれて居る宋子の思想が共通する點からも肯定し得る。この事に就いては更に後の條に述べやう。荀子の非十二子篇には宋鉞としてあるが、解蔽篇、天論篇には宋子とし、正論篇には子宋子としてある。宋子とあるのは、孔丘を孔子と言ひ、孟軻を孟子と言ひ、

管仲を管子と言ふのと同じ使ひ方である。子宋子と言ふ風に姓の上に更に子の字を加へることも、可成例のあるとである。これに就いて楊倬は正論篇の注に、「何休注公羊曰以子冠氏上者。著其師也。言此者蓋以難宋子之徒也」と説明して居る。春秋公羊傳に子沈子と言つた場合があるが。子宋子と言つたのは此と同じく其が師であることを著はすものであり、荀子が正論篇に斯く言つたのは、荀子の師であるがため言つたのではなく、宋子の學徒と議論し、其の師の説の誤謬を指摘し、なほ之に敬意を失はぬためと楊倬は解釋して居る。

三

然らば宋子は何時頃の人であるか、何國の人であるか、孟子の告子下章の趙岐の注には、宋、輕宋人、名輕、學士年長者、故謂之先生とある。孟子の本文に、孟子が宋、輕に石丘で遇つて其の行先を尋ねた時、「先生」と呼び掛けて居る。これを趙岐が斯く説明したのであるが、これによれば宋子は宋國の人で、孟子と時代を同じうし、孟子よりは年長者であることを知り得る。荀子の非十二子篇の楊倬の注には、「輕宋人、與孟子尹文子彭蒙慎到同時」とあるが、楊倬が宋、銜を宋人と言つたのは恐らく孟子の趙岐の

注に基いたのであらう。孟子と同時代と言つたのは孟子の本文から自然に明白な事である。尹文子と同時代としたのは、莊子の天下篇に莊周か彼以前及同時の有力な學者を掲げ其の學説を批評して居る中に、宋鉞と尹文とを一家として述べてゐるところから言つたものであらう。又彭蒙と慎到とは同じく莊子の天下篇の中に田駢を加へ三人を一家としてある點から推知したものであらう。孟子は齋の宣王に説いて居るが、漢の劉向の説苑に尹文が齊の宣王に説いた言葉を載せて居り、四庫全書總目提要の尹文子の條には、呂氏春秋に尹文子が齊の湣王に答へた言葉を載せて居るところから見れば、尹文と孟子とは約ば同時代に生存して居た學者らしい従つて宋子も齊の宣王の頃に生存し孟子よりは先輩であると言ひ得る。尹文と宋子との關係について諸家の説を見れば、荀子の正論篇の楊倬の注には「宋子蓋尹文弟子」と言ひ、尹文と宋子とが師弟關係あるものとして居る。然し「蓋」と言ふ語は極めて蓋然的な意味を有し、斷定的のものではない。荀子の本文には尹文子と宋子との思想上の關係を述べたものはない。只莊子の天下篇に「宋鉞尹文」とあつて兩者の思想の共通點を把へて叙述し批評して居る。莊子は兩者の思想の上に密接な關係あるを認めて斯く言つたものであらうが、然し天下篇の記述からは、尹文子が宋子の師であるこ

とは断定し得ない。寧ろ天下篇の前後の記述から察すれば、宋子の方が尹文よりも先輩であるか、さなくば宋子の方が指導的地位に立つて居たのではないかと想像せらるゝのである。何故なれば、天下篇で宋鉞尹文を述ぶる前に、墨翟と禽滑釐とを叙列して居るが、禽滑釐は墨翟の弟子であるので之を下位に叙して居り、宋子、尹文子の次に彭蒙、田駢、慎到、更に後に關尹、老聃と叙列してあるのは、皆各派の思想に於て年代的に前後の關係あるか、又は思想上に影響感化を表示する順位と考へ得るからである。従つて思想の感化影響に關する楊倬の想像は當らず、寧ろ反對に考へ得るのである。然し何れにするも宋子と尹文とは時代も同じであり、學說の上に密接な關係があつたと丈は言ひ得る。漢書藝文志に「尹文子一卷」の注に「班固は、説齊宣王、先公孫龍、劉向云、與宋鉞俱游稷下」と言つて居るが、二人は當時學士の淵藪である稷下に游んで居たと見える。苟況も嘗つて稷下の學徒として其の牛耳を執つて居たことがあるので、宋子の學說を窺ひさてこそ自己の著述の破邪の方面に之を拉し來つたものであらう。茲に解し難きは漢書藝文志に「尹文子と宋子とを異なつた學派に屬せしめて居ることである。尹文子一卷に名家者流、今日の言葉に改むれば論理學派」の中にあり、宋子十八篇は小説家者流の中にある。此に由つて之を觀れば、班固が藝文

志を作製する頃には尙宋鉞の學說思想を記錄編纂した宋子十八卷といふものが存在して居たことを知り得る。今日は已に亡んで只荀子孟子莊子の中に殘る斷片によつて其の面影を偲ぶのみである。前に言へる如く宋子と尹文子との思想學說に密接な關係があり、莊子の如く之を一家として叙列して居るのに、何故に藝文志には名家者流に入れ、他は小説家者流に入れたのであらうか。最近發行の章炳麟の國學概論第三章哲學的派別の條に、宋鉞が小説家に數へられるのは、彼が他の學派と同じからざるによる。他の學派は高深の學理を用ゐて門人と研究したが、彼は人に逢へば便ち説き、義を陳ふる點は甚だ淺いからである。といふ意味の事を述べて居る。卽宋子が小説家に數へらるゝ理由は門人と討論するのでなく、逢ふ人毎に説いた點及其の議論の今日傳はるものが淺近である點とである。章氏が人に逢へば便ち説くと言つたのは恐らく孟子告子下章に孟子と石丘に逢つて語り、更に彼が秦楚の君に見えて戦争を休止せんことを勸説せんとすることを記述して居る所から考へつたことであらう。議論の今日傳はつて居るものが淺近であると説いて居るが。何れにするも其の著書が傳はらず、存するのは只其の片鱗の如きものであるから淺近とも言へるが、然し斷定的には言ひ得まい。藝文志の小説家の説明には、小説とは稗

官より出たもの街談巷語、道聽塗說者の造る所なり。』とある。世間の出來事の話の種になつたもの、即話柄で後世の學問の隨筆家の如きものであつたらう。章炳麟は國學概論の中に「小説とは此の時代(主として戰國時代)の小政客が六國の侯王に游說することゝは出來ず、只能く地方官の前で其の地方の話を説くもの。』と解して居る。宋子の説の孟子荀子莊子に殘存するものは單なる話柄でなく、人生問題を眞面目に取扱つた哲學的のものゝ様に思はれ、班固が之を小説家の中に入れた理由を知るに苦しむと同時に、章氏の小政客が地方官の前にて地方の時事を説けるものでないやうにも思はれる。のみならず孟子には宋慳が秦や楚の王に説きに行かうとすることを載せて居る點から見れば、六國の侯王に説き得ない人とも思はれない。斯る點から宋子を小説家の中に入れたのには可成の不合理があると言へる。漢書藝文志の注には「孫卿道宋子其言黃老意」とある。莊子や荀子を見れば、宋子は人間の本性は寡慾であるから出來る限り少い外物を以て満足して生活すべく、又人より侮辱を蒙つても辱とせず、これがために人と争ふことのないやうにすべきであるとの論は、道家の寡慾主義無抵抗主義に近い。此點から考へると藝文志の注の班固の言は當つて居る。然るに一方荀子の非十二子篇には墨子と宋子とを一つにして述べて居る。兩者の

議論の出發點の同異如何は考へることは出來ぬが、非戰論を主張し、これを實行しやうと努力した點は、兩者相似て居る。本より宋子の議論の詳細は不明であるから、全てを斷言的に主張することは出來ないが、諸書に残存する宋子の議論の斷片から推せば、宋子の思想には道家的の要素も墨家的の要素をも有して居たものと想像し得る。

四

荀子の非十二子篇、莊子の天下篇及韓非子の顯學篇は夫々の著書に於て約ぼ同じ目的を以て書かれたものである。即ち他の諸篇に於ては自己の懷抱せる意見を積極的に主張し叙述し、此等の篇に於ては自己と異なる思想を有する學者の所説を掲げ、其の誤謬を指摘し、因つて以て自己の立場を明にせるものである。破邪顯正といふ言葉を借つて説明すれば、他の諸篇は顯正であり、此等の篇は破邪の任務を有して居る。されば此等の篇によつて、著者が著者以外の同時又は以前の他の思想家を如何に視て居たか。従つて著者の關心する如何なる思想家又は思想系統が存在して居たかを知り得る。韓非子の顯學篇には、當時有名な學派は儒家と墨家であり、儒家の至る

所は孔子。墨家の至る所は墨翟であるが、今日儒家は已に入派の儒に分れ、墨家は又三派の墨に分れて居ると言ひ、夫々の派の主張を掲げ、之に對して批評を加へて居るが、宋子は此等の中に列せられて居らぬ。韓非子は戰國時代の終末期に存在した學者で、荀子の弟子と言はれて居るが、荀子は非十二子篇や正論篇解蔽篇で、しきりに宋子の所説を引用し、之を駁撃して居るのに、韓非子が問題にして居ないのは何故であらうか。荀子の天論篇には宋子を老子墨子と同列にして論じ、非十二子篇には墨翟と宋子とを一括し、他の學者と並べて論じて居る。正論篇には今子宋子嚴然而好説。聚人徒。立師學。成文曲。」と述べ宋子が學説の宣傳をなし、門徒を聚めて相當の勢力を有して居た事を注意して居る。然るにそれが韓非子に問題とされない理由は、勿論今日より之を説明するは困難であるが、臆測を以てすれば、恐らく宋子の學問の影響を受けた人々の中に之を繼承して世の中に盛に宣傳し傳播するに足る有力な人を欠いたために、一時的の流行に過ぎず。彼の死後は萎靡振はず、韓非子の問題とするに足らなかつたのではあるまいか。莊子の天下篇には墨翟と禽滑釐とを一類の思想家とし、(二)宋鉞、尹文、(三)彭蒙、田駢、慎到、(四)關尹老聃、(五)惠施と夫々類を分つて掲げ、其の所説の綱領を述べ、之に批評を加へて居る。此の中には彼の時代に現存しない關尹老

聃等が擧げられて居る。又墨翟にしても莊子よりも時代は先である。然し以上によつて宋子の學説は世間に相當の勢力を有し、門徒も可成に有つたが、後に振はなくなつたものと思はれる。

五

前にも言へる如く、宋子の著述は班固が藝文志を作つた頃は存在して居たやうであるが、今日之を見ることは出來ない。従つて宋子の學説の内容を知らうとすれば他書に引用せられて居るものを通して研究するより外に道はない。他書に引用せられて居るものは駁撃の的となつたもので、夫が宋子の學説の本質的な中心をなすものか否か斷言するに躊躇せざるを得ない、然し一面から考へると、駁撃の的となつて居る説は駁撃した思想家と異つた立場に立つて居るものであらうから、其は又駁撃された思想家の獨異な思想學説とも見得る、宋子の學説で他の思想家に駁撃せられ居るものは如何なるものであらうか。先づ荀子に就いて見れば荀子天論篇に「宋子有見於少。無見於多。」とあるが、これは同書の正論篇に「子宋子曰人之情欲寡。而皆以己之情欲爲多是過也」とあるのから考へると、宋子の人の情欲は本質的には寡少なも

のであるとの議論は、人性の一面をのみ觀察してなしたる皮相の見解であると評したものである。宋子が人性をかく觀するところから寡慾を主張し、出來得る丈儉素な生活を理想としたことは、莊子の天下篇にも雖然其爲人太多、其自爲太少、曰請欲因置五升之飯足矣、と言ひ、此の點は墨子とも同じとして居る。宋子が人間の本性は寡慾とするのは如何なる理由に基くと考へたかは知ることが出來ぬ。若し其説が今日に存して居たならば、興味深いものであつたらう。けれども斯る考へは荀子の根本の考へと扞格するものである。荀子が人性を惡とするのは、人は其の本性に従へば限りなき慾望を有し、慾望に従つて物を追求すれば、限りある物は限りなき慾望を滿すことが出來ず、人と人との間に物の爭奪が起り、爭奪が起れば國家が亂れ、人民は不幸な生活をなさねばならぬ。そこで聖人が作つて禮義を制定し、慾望と物との平行的慾望の規制を計つたのであるが、これは人性が根本的に惡だからである。ことに多慾だからである。斯る考へからすれば、宋子の慾望の寡少を人間の本性とする説が非難されるのは當然である。

宋子の思想として著しいものは、墨子と同じく非戰を主張したことである。孟子の告子下篇によれば、宋桎が楚に行かんとして、孟子と石丘に遇つた。孟子は何地に

行くかを問うた、宋慳は楚と秦とが戦争をすると聞いたので之を中止させやう若し楚王が聞かねば秦王に説いて罷めさせやうと答へた。孟子は如何なる説を以て説くか其の大指が聞きたいと言つた。宋慳は戦争の不利を説いて罷めさせやうと答へた。これに對し利不利の問題で兩國の戦争を中止せしめることは不可能であるし、又不可である。仁義の立場から説かねばいかぬ旨を述べた。此の一條の話説によれば宋子は不利の點から非戰論を唱へたやうに思はれるが、荀子の正論篇には「子宋子曰。明見侮之不辱。使人不鬪。又人皆以見侮爲辱。故鬪也。知見侮之爲不辱。則不鬪矣。」との言葉をあげて居るがこれは凡そ人と人との争鬪は侮られて辱と思ふから憤慨して起るので、侮られても辱と思はねば争鬪は起らない。故に侮られても辱と思はぬことが争鬪を防止する良法であることを意味するので、單に人と人との間に限らず、國と國との間に於ても、亦同様である。他國から受けた侮辱に對する國民的憤激が戦争の原因となる。然しこれを侮辱と思はねば憤激もせず、従つて戦争もなくなる。この説に對し荀子は争鬪は惡むから起るもので、辱と思ふためではない。惡むといふことは人間として免がれないことであると戦争の避くべからざるを説いて居る。然し宋子の説は忍辱によつて戦争を防止しやうとするものである。普通の

考へては戦争は國君の野心に基くと考へらるゝのを、宋子が之を説かないのは、人間の本性は寡慾であるところではあるまいか。

要するに、宋子の學問は、一時盛に流行したらしいが、適當な後繼者を有しなかつたゝめか、或は彼自身の思想の中に後世に傳へらるべき價値を有しなかつたゝめか、遂に衰へて其の著述すら今日に傳はるものはない。孟子、莊子、荀子に載せられてある僅少の記述に其の面影を残すのみである。而し其の寡慾を主張し、非戰を標榜するあたりは、黒子と同じであり、又寡慾を主張する點では道家の説に似て居るとも言へる。然し他の思想家に見ることの出來ぬ特異な思想は見當らない、或は此が彼の思想の傳承を短くしたのかも知れない。